

## Christmas Books *The Chimes* における Toby

—無知の罪—

本 田 三 男

Toby's Dream in *The Chimes*

— A Trial for Innocence —

Mitsuo Honda

### I

1840年代のロンドンには、産業革命以降蓄積された多くの矛盾が極限とも呼べる状態に達し、富者と貧者の格差が拡大し、もはやいかなる美辞麗句も理論も空しく響き、最低限の社会的公平さすら保てないかのような悲惨な多数の弱者が存在し、虫けらの如く死んで行く事件が頻発し、心ある人々さえもこの不公平、不正義に心を痛めながらも我知らず現状に慣れ生活している、そんな都市であった。人間が人間として生き、最低限の誇りを胸に暮らしたいと願うのは当然の事だ。しかしその当然の思いが、あまりに厳しい現実の前に霧散し、よかれと考えられる方策が機能を十分に果たさない。かくして社会全体に恒常的不満が醸成され、事態は悪化の一途を辿る。こうした時代にあって、いやいつの時代もそうだが、大きな被害を受けるのは常に弱者だ。彼等に残された手段は二つしかない。ひたすら耐え続け、耐え切れなくなり死んで行くか、勝算もないのに暴力に訴え散って行くか、そのどちらかなのだ。

例えば、1838年から42年にかけて、放火事件の平均は49件であったものが1843年には102件にまで急増した事が報告されている<sup>1)</sup>。

英国議会在が手を拱いて見ていたわけではない。Lord Brougham<sup>2)</sup> (1778-1868) は The Reform Bill<sup>3)</sup>, The Factory Bill (1844) の成立に尽力し、悲惨な生活環境にある人々を救おうと努力している。しかしこれらは富者、支配者サイドの発想より出されたもので、事態の真の解決には程遠いものであった<sup>4)</sup>。又1844年4月16日 Mary Furley が救貧院での扱いの酷さに耐えかね子どもと自殺を図る。生き残った彼女は裁判にかけられ、幼児殺しの判決を受ける。彼女の事件は *The Chimes* の中で、Meg に対する Toby の潜在的不安として大きな意味を持つものとなる。

概して、社会矛盾、貧困等を扱った作品は、その出口の発見が困難で、不消化なものになりやすい傾向にある。厳しい状況に対する作家の怒りを表現して見せる事は出来る。だがそれは作家の自己満足と読者の共感と呼ぶ事はあっても、現実問題の解決に役立つ事は少ない。

扱う問題が完全に同時代のものである時それはなおさらである。しかし Dickens は、現実の問題を材題とし、実在の人物、意見をそのまま作品に取り込み、しかもクリスマス物としてこの作品を描いた<sup>5)</sup>。一つ一つの事件や問題点を同時代の人々が実体験したり、肌で感じ取っている事柄をあえて描いて見せた。彼が、1844年に *The Chimes* を世に問うた理由、各方面から

反論や賛同の声が渦巻く事を承知で、むしろそれを期待してこの作品を発表した理由は、何であつたのか。抑え難い憤り、それも一つの切っ掛けであつた事は間違ひなからう。

だが誰に対して何を語りかけようとしているのかと考えて見た時、この作品には奥の深い、人間の内部に問ひかける問題が含まれている様な気がする。作者はそう言ったものすべてを含めて、どの様な登場人物をどの様な舞台で活躍させたのか、又150年以上経った現在この作品が今なお我々に魅力ある作品であり続けているのは何故なのか、ここではそう言った点に関して考察して見たい。

## II

何世紀も年を経た Chimes<sup>6)</sup> が、古い教会の鐘楼に架かっている。この Chimes はかつて人々に愛され、華やかな日々を経験した事は間違ひないが、年月の経過と共に人々に忘れ去られた存在となっている。それでもなお朗々とした響きを轟かせ、雨の日も風の日も嵐の吹き荒れる日でさえ、人々に鐘の音を送り続けている。

Dickens は作品冒頭の Chimes の描写の中で、まるで鐘が時の経過とともに人格化されているかのような雰囲気を漂わせている。この鐘のある教会の建物の一角に一人の老人が立っている。

冬ともなれば、身を隠す場所とてなく厳しい天候のなすがままで、甲斐なき、老人の身を守る努力もただ哀れを誘うばかりだ。

主人公 Toby Veck の登場は、作者独特のユーモアのこもった文章で紹介されて行く。だが、教会、鐘楼、鐘、そして Toby の描写で始まるこの作品の導入で、見逃す事の出来ない事がある。それは、作品の展開の中で重要な役割を担うこれらの描写が、それぞれに暗く厳しい口調で語られていると言う点だ。人影とてない夜の教会、そこを我が物顔で吹き抜ける風、はるか地上高く鐘楼に巣を張る蜘蛛、そして仕事を待って、どんな日も年中佇む Toby。

A hard frost, too, or a fall of snow, was an Event; and it seemed to do him good, somehow or other—it would have been hard to say in what respect though, Toby !

So wind and frost and snow, and perhaps a good stiff storm of hail, were Toby Veck's red-letter days.<sup>7)</sup> (P. 83)

作者は、「厳しい天候の日が Toby の祭日であつた」と語るが、これは裏を返せば、配達夫としての仕事が無い事を意味し、その上その為に食事にもありつけない事を示す。これらの導入部分は、すべて作品の展開を暗示するものとなっているが、作者は明確な意図を持ってこれらの場面を書き、一つ一つの場面が蜘蛛糸の様に伸び、絡まり、それでいて確かな一つの世界を構成している。さらに中心は時として所在が移動するかに見えて確実にそこにある。

Toby は僅かな賃金のため一年中教会の一角に陣取り、通りに目を凝らしながら仕事の合図は無いかと待っている。もちろん待っている時間が長い。必然的に彼は空想の世界に遊ぶ。空想する彼に定期的に語りかけてくれる“者”、それが Chimes なのだ。Toby にはいつしか、鐘の音が人の言葉のように感じられ始め、一方通行の会話ではあっても、鐘が常に励ましてくれていると思ひ込む。

新年間近の寒い日、体を暖めようと小走りの動き<sup>8)</sup>を繰り返す彼の耳に12時を告げる鐘の音が聞こえる。彼は食事時間が来た事を知る。が生憎この日は稼ぎがなく、何も口にする事が出来ない。

‘Dinner-time, eh!’ repeated Toby, using his right-hand muffler like an infantine boxing-glove, and punishing his chest for being cold. ‘Ah-h-h-h!’ He took a silent trot, after that, for a minute or two. ‘There’s nothing,’ said Toby, breaking forth afresh—but here he stopped short in his trot, and with a face of great interest and some alarm, felt his nose carefully all the way up. It was but a little way (not being much of a nose) and he had soon finished. ‘I thought it was gone,’ said Toby, trotting off again. ‘It’s all right, however. I am sure I couldn’t blame it if it was to go. It has a precious hard service of it in the bitter weather, and precious little to look forward to; for I don’t take snuff myself. It’s a good deal tried, poor creature, at the best of times; for when it does get hold of a pleasant whiff or so (which an’t too often), it’s generally from somebody else’s dinner, a-coming home from the baker’s.’ (P. 86)

＜「食事時なのか。」とトビーは右手に巻いたマフラーを、子どもの遊ぶ拳闘のグローブのように使い、冷えた胸を殴打しながら繰り返した。「あーおー」。その後彼は一、二分無言で小走りを続けた。「何もない」と再び語り始めてトビーは言った。しかし、それだけ言うと彼は足の動きを止めた、そして大いに興味のある、ある驚きのこもった表情を浮かべて注意深く自分の鼻筋を触って見た。(さしたる鼻ではなかった) その道筋はごく短いものだった。だから彼の動作はすぐに終わった。「無くなってしまったのかと思った。」とトビーは再び小走りになって言った。「だが大丈夫だった。若し鼻がいなくなっても責める事は出来ないな。厳しい寒さの中で辛い仕事をしているのに、願いはほとんど叶えてもらえないのだからな。私は匂いを嗅ぐ事がない。哀れな鼻だ。最高の時でも大いなる試練を受けている。何故なら(度々でもないのに) 嬉しい匂いを嗅ぐ時があったとしても、それは大抵パン屋から帰りの誰か他人のパンの匂いなのだから。」＞

ここで描写される Toby の行動や思考は思わず笑いを誘う。だが笑いの後でふと真顔になる。思わず笑いは込み上げてくるが、一瞬後に、語られている事態の深刻さ、悲惨さに気付くからである。笑いと涙。作者は読者の顔をじっと見つめ反応を窺っている。そんな哀しい雰囲気の高揚場面と言える。

Toby の思考は食事から、食事出来ない現実へと移り、己の境遇に思いを馳せる。この時彼の頭を過った考えは、彼の性格を知る上で、又作品全体の展開、作品のテーマを知る上でも大きな意味を持っている。

‘It seems as if we can’t go right, or do right, or be righted,’ I hadn’t much schooling, myself, when I was young; and I can’t make out whether we have any business on the face of the earth, or not. Sometimes I think we must have—a little; and sometimes I think we must be intruding. I get so puzzled sometimes that I am not even able to make up my mind whether there is any good at all in us, or where we are born bad. We seem to be dreadful things; we seem to give a deal of trouble; we are always being complained of and guarded against. One way or other, we fill the papers. Talk of a New Year!’ ‘I can bear up as well as another man at most times; better than a good many, for I am as strong as a lion, and all men an’t; but supposing it should really be that we have no right to a New Year—supposing we really *are* intruding—’ (p. 87)

＜私達は善なる存在として生きて行けない、善を為せない、神が我々をそのように造りた

もうていない様に思える。私は子どもの時十分な教育を受けなかった<sup>9)</sup>。だから私にはこの地上で私達が存在する意味があるのかどうか分からない。時々少しではあっても存在理由がきつとあると思う。そして時々には邪魔な者だと思ふ。時々何が何だか分からなくなってしまい、私達貧しき者の中に善があるのか、それとも私達は悪に生まれついているのか決める事さえ出来ない時がある。私達は恐ろしい存在に見える。多くの面倒を掛けているように思える。私達はいつも不満の対象だし警戒されている。どうしてか新聞種になっている。新年について語るだなんて。大抵の場合私は他の者と同じくらい耐える力がある。いや多くの人々よりもっと耐える力がある。私は獅子の如く意志が強く、すべての人はそうではないからだ。しかし私達に新年を迎える何の権利も無いと言うのがもし本当なら、私達が本当に社会の害となっているとしたら—。>

*The Chimes* の前年に発表され、好評を博し、今でもなお名作として輝く *A Christmas Carol* に於て、重要なテーマは、Scrooge が他者に頑に閉ざしていた心を、三人の幽霊の力を借り、社会に対し、他者に対し開いて行き、人と人の共通理解や思い遣る心に幸福があるのを知って行く過程の中にあつた。しかしこの作品では、Toby はそうした一個人として的人格を持たず、むしろ 'Victorian poor' を代表する人物として描かれ、社会の矛盾、不正義を指弾する役割を与えられた人物と考えられている。又作品全体を通して、Meg に対する Toby の愛、つまり 'family-love' がモチーフとしてあるとも言われている。確かにこれらは、作品中で重要な意味を持ち、作家もそれを意識していたことは間違いなからう。

前者について考えれば、Toby の人物像を示す一つの手掛かりとして、上記引用文に前後して Meg が登場する。彼女は恋人 Richard<sup>10)</sup> との結婚を決意し、彼と連れ立って Toby の仕事場、教会にやって来る。手土産として、おそらく食事に有りつけないであろう父に素晴らしい御馳走を持参する。その中身を言い当てさせようとする Meg と Toby の遣り取りは、愛情に溢れ、作品の中でも最も感銘を受ける場面の一つだが、ここで作者は貧しくても幸福感に満ちた親娘の会話の奥に厳しい現実を隠している。Meg の持参したものは、湯気の立つ牛の腸の肉汁であるが、Toby の頭に浮かぶものは、'polonies', 'trotters', 'liver', 'pettitoes', 'the stringiness of cock's heads', 'chitterlings' なのだ。彼の境遇から、思いつく最高の御馳走は高々その程度なのだ。しかも最後に到達した正解も 'tripe' でしかない。ここに至るまでの二人の会話や仕種は、正にこれこそ愛し、信頼し合う者同士の至福な世界。それを作者は見事に描いて見せる。貧しくはあるが、信頼と思い遣りに包まれた世界、読者は Toby と Meg の魅力に引き込まれて行く。Toby の食事が終わりかけた時、Meg は本題を切り出す。二人の婚約の報告を。ここで Meg が語る決意の言葉は単なる筋の展開を越え、重要な意味を持っている。

'He says then, father, Meg continued, lifting up her eyes at last, and speaking in a tremble, but quite plainly; 'another year is nearly gone, and where is the use of waiting on from year to year, when it is so unlikely we shall ever be better off than we are now? He says we are poor now, father, and we shall be poor then, but we are young now, and years will make us old before we know it. He says that if we wait: people in our condition: until we see our way quite clearly, the way will be a narrow one indeed—the common way—the Grave, father.'

(p. 92)

この作品が書かれた時、ロンドンではすでに 'Victorian poor' の存在が放置出来ない極限状態に至っており、そこから派生する事件、つまり労働者の苛酷な労働、売春婦に身を落とさざる

を得ない貧しき女性達、アルコール中毒、自殺、幼児殺し等の事件が頻発し新聞紙上を賑わせていた。そして貧困に起因する社会問題解決の一方策として、経済力の無い者は安易に結婚すべきではない、そうした結婚が悪循環をもたらし、社会犯罪が増加して行くとの意見<sup>11)</sup>が公然と語られていた。引用文に見られる Meg の決意はその意味で、単なる作品中の台詞を越えて、作者のそうした意見に対する反論と考えられる。必死の思いで人生を生き、心底愛し合う二人が、貧しさの為に家庭を築く事も許されない。これは公平な事か。作者の怒りは、素晴らしき女性 Meg を描き、その Meg も救われないのかと言う挑戦として表出している。作品では Meg と Richard は、あまりに唐突などんでん返りで結ばれ祝福されるが、作者自身これらの問題に対する解決方法、確たる信念があったわけではない。その出口の見えないもやもやが、この作品を複雑なものにし、ハッピーエンドとはなってもなお割り切れない感情、人間個々の力ではどうしようもない無力感を後に残す、“重い作品”にしているのかも知れない。

作品の登場人物は、明確な性格分けがなされている。心なき富者、心優しい貧者それぞれの論理が、パターン化されて描かれて行く。

Toby が御馳走を食べ終えようとした時登場する、Alderman Cute,<sup>12)</sup> Filer, 又 Cute からの封書を Toby が届ける Sir Joseph Bowley, Lady Bowley, これらの人々は、富者の論理で行動する。Cute と Sir J. Bowley は現実に実在の人物がモデルであり、従って両者に対する痛烈な批判が、作者に対する種々の反発、反論を引き起こすのだが、いずれにしても作者又は読者の脳裏に実在する人物のイメージが浮かぶ時、それらの人物は作中人物として永遠の存在に成り得ない傾向にある。*The Chimes* に於けるこの二人も、その運命を免れ得ていないと言えよう。一方貧者として描かれる人物は、Toby, Meg, Will Fern, その姪 Lilian, Toby の夢で Meg を裏切り、自らも自暴自棄の生活の果てに死んで行く Richard が挙げられる。この人々の中で、厳密には Toby 以外は同じ役割と言えるかも知れないが、特に Will Fern は、生来は心優しい人物だが、資本家達の搾取に抵抗し、暴力も辞さない人物として描かれる。その意味で明らかに彼は、当時ロンドンを騒がせていた多くの事件から作り出された人物で、彼が語る；

‘Who can give back my liberty, who can bive me back my good name, who can bive me back my innocent niece? Not all the Lords and Ladies in wide England. But, gentlemen, gentlemen, dealing with other men like me, begin at the right end. Give us, in mercy, better homes when we’re a-lying in our cradles; give us better food when we’re a-working for our lives; give us kinder laws to bring us back when we’re a-going wrong; and don’t set Jail, Jail, Jail, afore us, everywhere we turn. There an’t a condescension you can show the Labourer then, that he won’t take, as ready and as grateful as a man can be: for he has a patient, peaceful, willing heart. But you must put his rightful spirit in him first; for whether he’s a wreck and ruin such as me, or is like one of them that stand here now, his spirits is divided from you at this time. Bring it back, gentlefolks, bring it back! Bring it back, afore the day comes when even his Bible changes in his altered mind, and the words seem to him to read, as they have sometimes read in my own eyes—in Jail; “Whither thou goest, I can Not go; where thou lodgest, I do Not lodge; thy people are Not my people; Nor thy God my God!”<sup>13)</sup> (p. 133)

と言う演説で見られるように、作者が読者に対し、又 Cute や Bowley に代表される富者に対し投げかけた問題提起を語らせる人物であると言えよう。彼の言う「生まれた瞬間から大きな格差が有り、人生の針路選択の自由がない。貧者は惨めに死んで行く。」と言う内容は、鐘が

Toby に知れと求め続ける真実であるが、登場人物が作品の中でエネルギーを持ち、一つの人格として機能するか否かとの視点に立てば、Fern は残念ながら、Cute や Bowley, Filer 達と何ら変わらない役割しか果たしていないように思える。

作品の展開に於いて重要な役割を持ち、読者への印象が最も強烈に思えるのは Meg である。彼女はある意味では、理想化された女性で、父親への愛、Richard への思い、Lilian との信頼関係、作品中独特な役割を演じる Mrs. Chickenstalker, Toby の夢で彼女の夫となる Mr. Tugby 達との関わりで、あくまで心清く、どんな極貧の状況下でも、すべての苦しみに耐え、希望を持って生き続けようとする女性として描かれる。だが現実社会にあっては、Meg のように美しく、誇りを保ち、生き続ける事は不可能だろう。それゆえ作者は Meg のもう一つの姿として、売春婦に身を落とさざるを得ない Lilian を作り出したのではなかろうか。

Alderman Cute が Toby に語った、'She's much too handsome, my man,' 'The chances are, that she'll come to no good, I clearly see. Observe what I say. Take care of her!' (p. 100) はそのまま Lilian の辿る運命を暗示している。しかし実際には Meg がそうなっても不思議ではなかったのだ。だが Meg は、最高に心清く、理想の女性として設定する必要があった。そこで作者は、彼女の分身として Lilian を登場させたのではなかろうか。そう考えると Meg と Lilian は一体であり、現実には Lilian の運命がより可能性の高いものであったと考えられる。これまで登場人物が明確に二分化され設定されている事を述べて来たが、Mrs. Tugby, Mr. Tugby についても同様な事が言える。この両者の場合は、富者、貧者のいずれの範疇にも区分出来ない。ただ情情的に、前者は貧者の側に後者は富者の側に立っていると言えよう。そして二人を分けているのはただ、思い遣る心があるか否か、その一点である。人の苦しみ、悲しみ、喜びを理解出来る人物。こうした人物無くしては、作品に安堵感を醸し出せない存在。特に Mrs. Tugby は Dickens ならではの登場人物として、作品に温かみを与えている、隠し味的役割を持つ女性としての位置をしめていると言えよう。

### III

*The Chimes* の登場人物、各場面のかなりの部分が、1840年代ロンドンの実在の人物をモデルにしたり、実際の社会問題であった。つまり Dickens は“現在”の問題を“現在”にそのまま提示し、自らの立場を社会に対して明確にした。作者は鐘と Toby を登場させた後語る。

For my part, I confess myself of Toby Veck's belief, for I am sure he had opportunities enough of forming a correct one. And whatever Toby Veck said, I say. And I take my stand by Toby Veck,... (p. 83)

Toby は善き人物である。どんなに苦しくても、仕事が無くても耐える力がある。痩せこけた老人だが意志は強く、配達夫としての職業に誇りを持っている。自分の力で生きている自負がある。客観的には、さほど役立ちそうにない配達夫だから、仕事が廻って来る事はめったにない。必然的に仕事待ちの時間が長くなる。年中教会の前に佇み、一人物思う生活を送っていると、定期的に聞こえて来る鐘の音に親しみを覚え、ついにはそれが自分への励ましの言葉に思えるようになって不思議ではない。しかしすでに見たように、Toby は心に一つの重大な疑念をいだいている。それは貧しき者は本質的に悪ではないかとの思いである。社会で起こる種々な事件や犯罪、それにはほとんど貧困が係わっている。貧しき事それ自体が罪なのではないか。Toby は他の点では人間として非の打ち所のない人物だが、心の中のこの一点の曇りが、

作品を展開させて行く起点となる。彼が 'tripe' を食べ終えようとした時、Cute や Mr. Filer が現われ、Filer は Toby に語る。「その肉汁程罪つくりな食べ物はない。今食べている肉汁があれば、何人の未亡人や孤児が救われる事か。そう考えるとトビーは彼等から食べ物を奪う強盗である。」と。Mr. Filer の言葉は冗談であるが、自らを問題の外に置き、Toby にまわって来る食べ物など無いと、よくも言えたものだ。が Toby は彼の言葉を真剣に受け止め、ショックを受ける。

Trotty was so shocked, that it gave him no concern to see the Alderman finish the tripe himself. It was a relief to get rid of it, anyhow. (p. 95)

Toby に取って、この上ない御馳走。鍋に指を入れ、掻き回されるのを見ただけで胸がどきどきする 'tripe'、それを食べられても、罪から救われたと心から喜ぶ Toby。読者は Cute や Filer の態度に怒りを覚えるが同時に、あまりに無垢な Toby の心にも違和感を感じる。そして Toby は、彼等の身勝手な論理に混乱しながらも圧倒され、'No, no. We can't go right or do right,' 'There is no good in us. We are born bad!' (p. 96) と考える。彼の心の中の疑念は少しだけ広がったのだ。さらに二人は、Meg と Richard の婚約を聞き、貧しき者は結婚する権利はないと語る。最後に Cute は、先で述べたように Meg の美貌をとらえ、Toby に彼女の将来を暗示する。この言葉に Toby は再度考える。'Wrong every way. Wrong every way!' 'Born bad. No business here!' (p. 100) 傲慢でからかい半分の Cute 達。真剣に考え込んで行く Toby。読者は表現し難い苛立ちを感じるが、そこには Dickens の緻密な計算がある。つまり読者の思いは鐘の思いに見事に一体化させられて行くのだ。

Toby は満足を知る男であった。どんな些細な事にも喜びと希望を見出し、生きて行く事が出来た。しかし今ここで彼は意気消沈する。第一章終盤の場面は、作品の約半分を割いて執拗に展開される Toby の夢への序章となるものだ。さらに鐘の持つ大きな役割と、この作品のテーマへの手掛かりとなる部分として看過出来ないものになっている。

The Chimes came clashing in upon him as he said the words. Full, loud, and sounding—but with no encouragement. No, not a drop. 'The tune's changed,' cried the old man, as he listened. 'There's not a word of all that fancy in it. Why should there be? I have no business with the New Year nor with the old one neither. Let me die!' Still the Bells, pealing forth their changes, made the very air spin. Put'em down, Put'em down! Good old times! Facts and Figures! Put'em down, Put'em down! If they said anything they said this, until the brain of Toby reeled. He pressed his bewildered head between his hands, as if to keep it from splitting asunder. A well-timed action, as it happened; for finding the letter in one of them, and being by that means reminded of his charge, he fell, mechanically, into his usual trot, and trotted off. (pp. 100-101)

まるで劇の中で道化が観客に筋の展開を暗示して見せるように、Dickens は読者に作品のエッセンスをそのまま語って見せているかのようである。鐘は Toby に対する優しい響きを変える。怒りで身体を震わせ語る、'Put'em down!' は Cute の口癖である。それを借りて鐘が Toby に警告を発している。「そんな考えは無くしてしまえ」と言っているのは、Filer の考え、Cute の考え、さらに、'the good old times'<sup>14)</sup> としか語らない赤ら顔の紳士の考え、つまり富める者の考えなのだ。Toby は不思議な人物だ。彼の心はまるで幼児のそのように純白に見える。すでに見て来た如く、Cute 達の言葉をそのまま吸収し、その考えに染まって行く。そんな

な彼を鐘は引き止めようとする。作品を Toby と鐘との関係で捉えると、きわめて単純明快な一本の流れが有る。それは鐘の Toby に対する、原点に帰れと言う働きかけである。Toby が Toby で無くなる事。Toby が本来の自分に気付き真実を知る過程。Dickens の語ろうとしているものは、正にこの単純な真実の中にあるのではなからうか。そう考えると鐘が時に作者自身と重なって感じられたり、時に運命に、時には神そのものに思えるのも理解出来る。

憂鬱な気持ちで Cute からの手紙を Sir Joseph Bowley に届ける Toby だが、Bowley の屋敷で彼は Bowley, Mr. Fish, Lady Bowley に出会う。そこで彼は、Bowley の 'I am the poor Man's Friend,' 'As such I may be taunted. As such I have been taunted. But I ask no other title.' (p. 105) という言葉を聞き、その崇高な精神を祝福する。さらに「貧しき者の父だ。」と語るのを耳にし、Toby の沈んだ心は明るさを取り戻して行く。彼は Bowley 邸で、心底 Bowley の精神と言葉に感銘を受け、ついには彼の考えが Toby の考えに成って行く。Dickens は、この間の推移を実に巧みに語って行く。しかし Toby の考えが Bowley のそれに近づけば近づく程、読者は彼の世界が鐘の世界から離れて行くのを感じる。

鐘はすでに Toby に警告を発した。それでも彼は同じ失敗を繰り返す。鐘は今ではただ、坂道を転がる様に落ちて行く Toby の心を、ただじっと凝視するだけなのだ。

すでに述べた Toby の心の蟠はかくして、彼の心の中に確たる位置を占め、かつ強固になって行く。とは言え、彼の愛情、行動に変化があるわけではない。Cute の手紙に記されていた Will Fern という“不逞の輩”にロンドンの雑踏の中で出会った時の彼の咄嗟の行動は、何とか彼と彼の連れた少女に手を差し延べようとするものだった。二人を粗末な我が家に連れ帰り、Meg と共に心から遇そうとする姿は、彼の生来の人の好きから出ている。この時、彼の態度は異常に高揚し、浮かれている。Meg が何度も「お父さんどうしたの。」と声をかける程浮ついている。ここでも読者は厳しい鐘の視線を意識する。Toby の夢に於ける彼への“裁き”を無意識に感じ取り苛立つ Toby。その苛立ちが異様に浮かれた態度となっている。

二組の相反する階級の社会描写を横糸とすれば、鐘と Toby の関係は、一貫した、論理的矛盾のない縦糸である。読者はこの大きな流れに注目する時常に、作品のテーマを見失う事はない。

鐘が追求し続ける対象は、Cute でもなければ Bowley でもない。作者が 'his good intentions' (p. 84) と位置づけ、'I take my stand by Toby Veck.' (p. 85) と語る人物なのだ。又彼の内面に曇りを生じさせる切っ掛けとして、作者は新聞を小道具として使う。貧しい事それ自体が悪ではないかと疑い始めたのは、彼が大切に持っている新聞の記事からであったし、決定的に夢の世界に足を踏み込む事になるのも、その記事であった。

その記事とは、生活に困窮し、生きる事に絶望した一女性が、我が子を道連れに自殺を図った事件に関するものであったが、この恐ろしい、魂を震撼させる事件を考え、ぞっとして彼は叫ぶ、'Unnatural and cruel!' 'Unnatural and cruel! None but people who had heart, born bad, who had no business on the earth, could do such deeds. It's too true, all I've heard to-day; too just, too full of proof. We're Bad!' (p. 117)

もちろん観念論的には、いついかなる状況にあっても、人間が人間として犯してはならない罪があると語るの容易だ。その意味で Toby の下した結論は正しいと言えなくもない。だがここで鐘は問う。はたしていついかなる時にもかと。作者は、Toby の境地と同じ事を語り続ける Cute の精神構造に大きな違いがある事を語って来た。それでもなお、この一点に関して鐘は両者の一致を許さない。The Chimes took up the words so suddenly—burst out so loud, and clear, and sonorous—that the Bells seemed to strike him in his chair. (p. 117) 第2章終盤で描写



されるものは、鐘と Toby の時間と空間を越えた精神の一体化だが、それは読者に神と悪魔とのあの一瞬の出来事を連想させる。又以降延々と述べられて行く Toby に対する“試練”の場面は、ヨブ記のそれを感じさせないでもない。

しかし第三章冒頭の描写、以後の展開、さらに注意深く読み返した時気付く作品全体のトーンを考えて見ると、作者は、“最後の審判”を意識して作品を構成したのではないかと思わざるを得ない。鐘楼の描写に見られる、高く高く、どこまでも高く天空に聳え立つイメージ。暗闇の中で意識の底に深く深く沈んで行き、そこから再び上に上にと引き上げられる Toby の意識。これらの物理的、精神的上下運動のイメージは、まるで一度は、魂の奥底まで沈められた人間の意識が、抗し難い大きな力により引き上げられ裁かれるその姿に他ならない。

すでに述べたように、ここで注目すべき点は、裁かれるのは Toby 一人であると言う事実だ。Cute でもなければ Bowley でもない。Meg でもなければ Fern でもない。Toby に較べた時、彼以外のすべての登場人物は、鐘の眼中にはなく、その存在感が色褪せて行く印象を受ける。何故 Toby だけであるのか。どうも作者の意図は、この疑問に対する答えの中に隠されているような気がする。

この作品が現実社会を、あるがまま縮図的に描いたものである事はすでに述べた。富者の論理、行動パターンはそのまま、Dickens の同時代の人々に馴染み深いもので、Will Fern は搾取される労働者階級の怒り、不満を、彼らの視点で語らさせる為の人物であった。又 Meg と Richard の悲劇は、巷に氾濫する事例の一つにしかすぎない。売春婦に身を落とし死んで行く Lilian については、言うに及ばない。正にこの作品はフィクションと言うより、一ジャーナリストの目を通して語られる一篇のレポートであるとさえ言える。それでいて天才 Dickens の作家としての良心を満足させ、時代を越えて多くの読者の心を魅了している。その理由の一つは、鐘と Toby の世界が造り出すもの、宗教的であり宗教を越えたもの、むしろ哲学的とさえ言える世界を作者が造り出したからであろう。

Toby の夢は実に作品のおよそ半分を割いて描写され、その中には、あらゆる姿形の ‘goblin’ が、混沌の世界を示唆するかの如く動き回る。彼等は、旧年から新年への移行を知らせる鐘の音と共に出現した妖精であるが、この描写は日本の読者に除夜の鐘の打ち鳴らす108の煩悩を思い起こさせる。もちろん、作者の意識にそれが有ったとは思われないが、何れにしても、これは Toby が、思想の混乱の世界に足を踏み入れた事を意味する。又鐘の役割を考えた時、その怒りの音が、Toby の旅する二つの世界の境界を明示する象徴的意味を持つのは明白だ。

だが作品には音のイメージと同時に、明から暗へ、暗から明への光のイメージも効果的に使われている。Toby が現実世界から夢と現実の混在する夢の中に移行して行く時、その瞬間は完全な闇のイメージで描かれていた。闇から明へと彼の意識が引き上げられた時、そこはすでに鐘と Toby だけの世界、つまり裁きの世界であった。第三章のすべてと第四章のほとんどを使い展開して行く場面は、今で言えば、映画やテレビとそれを見ている観客との関係に例えられようか。すべての場面に音が有り、会話が聞こえて来る。しかし観客は、手を触れる事も、登場人物の運命を変える事も出来ない。ただ場面の中に引き込まれ、一体化し、同じように悩み、怒り、哀しむ事が出来るだけだ。この、文字だけを使い人間の現実の世界を、読者の脳裏にリアルに現出させる力。やはり Dickens は天才と言うべきなのだろう。

無数の面妖な goblin が、鐘の音が止むと同時に、まるで空に浮かぶ雲のように消え去った後、鐘の精そのものが登場する。

Then and not before, did Trotty see in every Bell a bearded figure of the bulk and stature of the Bell—incomprehensibly, a figure and the Bell itself. Gigantic, grave, and darkly

watchful of him, as he stood rooted to the ground. (p. 121)

鐘の精は厳しく Toby の心の中を凝視している。まず彼等は Toby に「言葉で鐘に仇をなした事はないか。」と尋ねる。鐘は語る。〈時又はその僕の口に、試練と失敗の日々、盲目の者に見える哀しみの深き痕跡を残す日々に対し、嘆きの叫びを飛び入れた者、誰の耳にも、そのような過去に対する後悔の声が聞こえてくるその時に、人々に彼等の助けが何よりも必要と語る事により、今にしか役に立たない叫びを飛び込んだ者、これを為したる者は、我等に仇なす者だ。そしてトビー、汝はそれを我等になしたのだ。〉(p. 123) さらに、〈我等の響きの中に、希望、喜び、痛み、哀しみに対する、又多くの哀しみに沈む群衆に対する、無関心あるいは、厳しい態度を示す音色を聞いた者、その教義が、それを糧としていては人間性が痩せ衰え、萎んで行く惨めな食べ物の量を計っていると言うのに、それが人間の感情と愛情を計っている、そのどんな教義にも我等が応えていると聞き取る者、その者は我等に仇をなしている。それを汝は我等になして来た。〉(pp. 123-124) 〈最後に、そして何よりも悪いのは、墮落を余儀なくさせられ、醜くなった同胞に背を向け、彼等を邪悪なりと切り捨て、彼等が落下の最中、失った土壌に生えていた草木の切れ端をつかみ、深淵の底に打ちつけられ死んで行くその時でさえ、それらを握って離さない、その善から離れ行く柵のない絶壁を哀れみの眼で迎い、見つめ得ない者は、神と人間に対し、時と永遠に対し仇をなしているのだ。〉(p. 124)

鐘の精のこの容赦のない告発の言葉は、もとより Toby の語った、‘Unnatural and cruel’, ‘We are Bad!’ を受けたものだ。鐘は幼児を道連れに自殺しようとした女性を、神の道に悖ると断定した Toby に、愛する Meg に同じ運命を辿らせ、その過程を目撃させる事により、真実の何たるかを悟らせようとしたのだ。‘Learn from her life, a living truth. Learn from the creature dearest to your heart how bad the bad are born.’ (p. 125) この真実を知って行く過程は、Toby に取って苦しい試練となるが、すでに見て来たように、これこそ作者が Toby を作り出し、彼を通して語ろうとした作品のテーマだと考えられる。そう考えて行くと、Toby の存在は、一個人としてではなく、貧しく心優しく、それでいて救われない善なる人々すべてと考えられ無くもない。前作 *Carol* の Scrooge と Toby の違いは、この一点、つまり Dickens が一個の人間を見据えているのか、それとも Toby の場合のように同様な多くの人々を意識して、作品を造り上げたかに有る。鐘の中から無数の goblin 達が湧いて出て空中を満たした如く、Toby の周囲には、彼と同じ多くの ‘Toby’ が苦痛に歪んだ顔で漂っている。作者はそのすべての ‘Toby’ に、真実を知れと語りかけている。

夢の中で Toby は、Meg の経験する悲惨な運命を目撃する。Meg のように希望を持ち、明るく生きようと努め、思い遣りに溢れた女性が、それ以外にはない運命に運ばれ、打ちのめされ、それでもじっと耐え続け、魂の潔癖さを失わない姿。それは Toby に取って拷問以外の何ものでもない。展望のない生活苦と Richard から受けた精神的苦悶にも耐え、心清く生き続ける Meg。その彼女が、最後の最後に、我が子の運命も Lilian のそれを辿る以外にないと言う現実を悟り、絶望のあまり入水自殺<sup>15)</sup> を決心する。それこそはいついかなる状況に於いても Toby が許せない事、人間のモラルに反すると考えた幼児殺しに他ならない。鐘は冷酷にも ‘Follow her! To desperation!’ (p. 149) と繰り返すのみだ。鐘は Toby の心を凝視している。彼がいかに親娘の情愛に訴え、祈り、哀願しても、妥協のない過酷な場面が展開されて行く。先にヨブ記について触れたが、鐘の姿は神の姿そのものである。だがヨブと Toby の間には大きな違いがある。ヨブは運命をすべて、あるがまま神意として受け入れる。Toby の場合はより人間的に描かれる。彼は己れの弱さすべてを鐘の前にさらけ出し、何よりも Meg の助命を願う。

今にも Meg が赤ん坊を胸に抱き、岸から川に身を投げようとした瞬間、Toby は叫ぶ、‘I have learnt it!’ ‘From the creature dearest to my heart! O save her, save her!’ (p. 150) すると彼の指は Meg の服を掴んでいる。感覚が彼に戻って来たのだ。

この場面で作作者の見事さが、遺憾無く発揮される。作品最大のクライマックスで作作者は、悪戯心を起こす。彼はそのまま、ハッピーエンドへと筆を進めない。わずか数行の展開だが、この作品への思い、怒りを作作者はすんなりと終熄させはしない。Toby は叫び続ける、‘I have learnt it!’ ‘O, have mercy on me in this hour, if, in my love for her, so young and good, I slandered Nature in the breast of mothers rendered desperate! Pity my presumption, wickedness, and ignorance, and save her.’ (p. 150)

＜「真実を知りました。今この時私を哀れみたまえ。あんなに若く、心清き Meg への愛の中で、もし私が、絶望に駆られた母親の心に潜む本性を中傷していたとしたら。

私の自惚れ、邪悪さ、無知を哀れみたまえ。そしてメグをお救い下さい。」＞

この言葉を発した瞬間、Toby の指の感覚が再びなくなる。鐘は一度許しかけた Toby の心を再度注視する。彼が本当に真実を悟ったとは認められなかったからだ。それはおそらく、彼の語った、‘rendered desperate’ が、鐘には納得し難い言葉に聞こえたのだろう。黙して語らず、じっと見つめる鐘の容赦ない視線が、Toby の心を射る。ついに Toby は、‘There is no loving mother on the earth who might come to this, if such a life had gone before.’ (p. 151) に気付く。この言葉に鐘は始めて Toby が真実を悟った事を知る。かくして Toby の夢は去り、彼は再度現実世界に帰って行く。

## VI

全作品中僅か3ページ弱で展開する突然の幸福な結末を読んでも、圧倒的迫力で描かれ続ける Meg 達の悲惨な運命を忘れ去る事が出来ない。現実から夢の世界へ、夢から現実へと展開する作品の構成の中で、夢の中の厳しく、悲惨な状況が、作品終了後 Meg や Richard の身に現実に降りかかるのではないかとの不安に馳られるからだ。それほど *The Chimes* で描かれる世界は、厳しく、哀しく、解決策のないものに思われる。すでに述べたように、Dickens 自身にもそれは有る筈もなく、又彼はそれを示そうとしたのでもない。ただ彼は Toby を通して、現実社会の多くの ‘Toby’ に真実を知り、自己存在を信じる事を知れと訴えかけたのだ。それを知ったとしても、現実の厳しさや悲劇が減少するものでもない。それでもなお、真実を知り、思い遣る心、幸福を追求する事への希望、喜ぶ感情の大切さを忘れてはならない、と作作者は心の底から叫んでいる。

Arthur W. ‘A’ Beckett は、*A Stage Version of “The Chimes”*<sup>16)</sup>の中で、作者自身の言葉として ‘The story of The Chimes pointed the moral that we must trust and hope, and neither doubt ourselves nor the good in another,’ を紹介しているが、鐘の精が Toby に求め続けたもの、つまりこの作品のテーマの一つは、まさにこの事であったように思われる。疲れ切った Will Fern に、‘Cheer up! Don’t give way. A new heart for a New Year, always!’ (p. 116) と励ます Toby。鐘の精はこの同じ言葉の意味を理解せよと求めたのだ。

Toby の本性は、人を信じ、希望を持ち続け得る人物だと言う点にある。しかし彼自身が鐘の精の告発に、‘In my ignorance’ と答えた如く、彼は無垢であり無知であった。彼が、彼の魂が無垢であったからこそ、作作者は Toby の味方であると明言し、鐘も又最初から彼を徹底的に

断罪する意図はなかった。それでも Toby は裁かれた。とするとその理由は一つ、彼の無知ゆえであった。自らを疑わず、人の善意も疑わない。この事の本質が、Toby には分からなかった。Cute や Bowley, 又 Filer の言葉に影響され、感動するにまで至る、さらに貧しき者は生来悪だと考えるようになる彼の無知。それまでの忍耐や、厳しく苦しい努力の過程に目を向ける事が出来ず、自殺や幼児殺しと言う結果のみを見て、人間のモラルに反すると断定する彼の無知。自分自身が Fern に語った励ましの言葉の意味を、自己の内面に振り向け得なかった彼の無知。鐘が告発し、裁こうとした Toby の罪は、彼のこれらの無知であったと言える。

従って、鐘の精に導かれ、9年後の世界を彷徨う彼の旅の目的は、これらの無知を一つ一つ克服し、真実の何たるかを悟って行く点にあった。だから夢の中では、Cute や Bowley に対する彼の態度は、明らかに怒りに満ちたそれに我自らず変化するものであり、それはそのまま作者の視点となっているのだ。だが最後まで彼が理解するのに苦しんだ問題は、愛と思ひ遣りの問題であった。彼の存在そのものが愛であり、思ひ遣りに満ちた Toby。それだけに一層、この点に関する真実を悟る作業は彼には困難だったのだ。分かっているが分かっていない。一見禅問答に思えるこの問題の真の理解を、鐘は Toby に求めた。それゆえ夢から酷めた時始めて Toby は真に善き老人としての、表面的現実の現象の奥に隠れた真実の姿が見抜け、常にあるがままの自分でおれ、自分を信じ、人を信じ、喜びを感じ、希望を持ち続ける事の出来る境地に至し得たのだ。

#### 注

- 1) *The Annual Register* (1844).
- 2) Sir Joseph Bowley, M. P. のモデルになった人物。*Encyclopedia Americana* によれば、1830年上院議員として Whig 党政府の大法官になるが、1834年 Tory 党政権誕生で、その職を失う。彼の最大の政治目標は、奴隷制度廃止、公教育の改善、法改正であったが、その方法は、合理的、世俗的、功利的であったと言われている。
- 3) 英国の選挙法改正案は、1832年、1867年、1884年に国会を通過したが、ここでは勿論1832年のそれを指す。
- 4) 1844年4月6日付けの *Punch* 紙が、Lord Brougham を激しく批判。
- 5) 作品の副題に、*A Godlin Story OF SOME BELLS THAT RANG AN OLD YEAR OUT AND A NEW ONE IN* とあるように、大晦日が、舞台となっている。
- 6) F. G. Kitton, *Charles Dickens, His Life, Writings, and Personality* (London, n.d.), p. 133 によれば、ストーリーも主題も決まったのに、タイトルを決めかね苦しんでいた Dickens に、突然教会の鐘の音が朗々と聞こえてきたとある。  
 ,as he sat at his table resolute for work, a maddening peal of chimes rose from the city of Genoa which lay beneath him—such a terrific clang and clash of all its steeples that made his ideas “spin round and round till they lost themselves in a whirl of vexation and giddiness, and dropped down dead.”
- 7) 本論で示すページは、*Oxford Illustrated Dickens* (1954) の *Christmas Books* のそれを示す。
- 8) 作品では、主人公について複数の名前が使われているが、本名は Toby Veck, その小走りの姿から Trotty が通り名。
- 9) この部分は、作者が自分の生立を意識して書いたものと思われる。だが同時に、Sir Joseph Bowley (Lord Brougham) の公教育改革論を受けて、Toby にそれを語らせたとの意味も含まれている。
- 10) 作者は最初 Meg の恋人の名を、鍛冶屋の守護聖人 St Clement に因み Clement としていたが、より一般的 Richard に変更した。
- 11) 作品の中で、Filer の言葉として語られるが、当時上流、中流階級の知識人によって宣伝されていた、社会改革の意見の一つ。Dickens は、貧者の立場に立ってこの考え方を批判している。
- 12) F. G. Kitton, *Charles Dickens*, (London, n.d.), p. 134 によれば、Sir Peter Laurie は、Dickens がイタリア旅行に旅立つ前、“Put down suicide.” を宣言し、作者は、彼の言う正義に猛反発を覚え、Cute を作り出したと述べられている。

Christmas Books: *The Chimes* における Toby (本田)

- 13) Fern の語った聖書の文句は実際には、  
;for whither thou goest I will go, and whither thou lodgest I will lodge;thy people shall be my people, and thy God my God; (The Book of Ruth, 1:16) となっているが、余りに心無い監獄の処遇に、ここでは聖書の言葉も変えられて祈られる、と言う Fern の真意を理解出来る者は、彼の演説の場面には、一人もいない。
- 14) 'the good old times' とは、ヘンリー 8 世の時代を指すが、作品中三度も彼への言及があり、それらはすべて、富者又は上流階級の者の言葉であるか、鐘に害をなした王として語られており、Dickens のヘンリー 8 世への批判的態度が窺える。
- 15) 当時余りにも悲惨な生活苦から、入水自殺が多発し、社会問題と成っていた。詩人 Thomas Hood (1799-1845) による *The Bridge of Sighs* は、この問題をテーマに作られた詩である。人生に絶望した Meg のような境遇の女性が、“嘆きの橋” から身を投げたのだ。
- 16) *The Dickensian* (The Dickens Fellowship, 1905), p. 317.

(英文学科 助教授)

—平成 2 年 9 月 27 日 受理—